

南コーカサス地方の新石器時代

—アゼルバイジャン第11次発掘調査(2018年)—

西秋 良宏 東京大学総合研究博物館教授
 アザド・ザイナロフ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員
 マンスル・マンスロフ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員
 ウルヴィア・ヘイダロヴァ 国立科学アカデミー考古学民族学研究所研究員
 下釜 和也 古代オリエント博物館研究員
 赤司 千恵 東京大学総合研究博物館学術支援職員
 新井 才二 総合研究大学院大学・日本学術振興会特別研究員
 桐原 弘亘 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

The Neolithisation of the Southern Caucasus: The 2018 Excavations at Damjili Cave, Azerbaijan

NISHIAKI, Yoshihiro Professor, The University of Tokyo
 ZAYNALOV, Azad Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan
 MUNSTROV, Munsur Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan
 HEYDAROVA, Ulvia Researcher, IAE, NAS, Azerbaijan
 SHIMOGAMA, Kazuya Associate curator, The Ancient Orient Museum
 AKASHI, Chie Project Academic Specialist, The University of Tokyo
 ARAI, Saiji JSPS Research Fellow, The Graduate University for Advanced Studies
 KIRIHARA, Hironobu MA student, Waseda University

1. はじめに

西アジアのいわゆる肥沃な三日月地帯が農耕牧畜発祥の地の一つであったこと、最古の試みは1万1000年以上も前にさかのぼることが判明して久しい。食料生産経済にいたる契機やプロセス、地域的な関係など詳細の研究がさらにすすめられている一方で、農耕牧畜経済がどのように周辺各地に拡散したのかの研究も大いに関心を呼んでいる。最も早く拡散した地域の一つはキプロス島であろう。大陸での農耕牧畜発生とはほぼ同時期に栽培植物や家畜動物が持ち込まれている。全く地続きにはならなかった島であるから、それらの持ち込みは相当に計画的、意図的であったと言いうる。一方、拡散が遅い地域もあった。たとえば、筆者がしばらく研究に関わったイラン南部のファール高原などは9000年前くらいになってようやく拡散の痕跡が現れる。2千年ほども遅れたのである。そして、本発表が対象とするコーカサス地方における食料生産経済の開始は8000年前くらいであるから、さらに遅い。農耕牧畜進展の中心地、北シリアからたかだか数百キロほどしか離れていないのにこうした違いが生じたのはなぜなのだろうか。

この問題を考えるにあたっては、少なくとも二つの論点があるだろう。一つは、拡散集団と拡散先にいた狩猟採集民との交流・交替関係。もう一つは、拡散先の自然環境への適応の問題である。拡散先に狩猟採集文化がしっかりと根付いている場合、食料生産集団の侵入、その経済拡散は容易でなかったことが予想される。また、自然環境が大いに異なる地への拡散にあたっては、技術的な適応をなさねばならないし、持ち込む動植物をも適応させる必要が生じる。コーカサス地方は自然環境がさほど肥沃な三日月地帯とは違わないから、現地の狩猟採集民との関係に着目した研究が重要になってこよう。

さて、このような問題意識の元、本年もアゼルバイジャンにおいて現地調査をおこなった。筆者らは2008年以来、ギョイトペ、ハッジ・エラムハンル・テペという二つの重要遺跡の発掘を継続し(図1)、前6千年紀初頭にさかのぼる当地最古の農耕社会の姿を明らかにすることができた。そこで2016年からは、より古い、地元の狩猟採集民社会を調べるべくダムジリ洞窟遺跡の発掘を開始した。この洞窟は1950年代から旧石器時代あるいは中石器時代の遺跡として知られていたが、層位的な調査がなされなかったため、詳



図1 関係遺跡の位置



図2 ダムジリ洞窟近景

細が全くわかっていなかったものである。我々の2016、2017年の調査は、この遺跡に確かに中石器時代の堆積があることを確定させた。また、その下層には中期旧石器時代の文化層があることも確認できた。

中石器時代文化層の発見は特に重要である。アゼルバイジャン、クラ川流域では初めての発見例であるから、農耕牧畜到来直前の地元集団の文化を定義する機会がついに得られたことになる。発掘区を拡大し、より充実した考古学的データを得るため、2018年には7月に約3週間の発掘をおこなった。

2. ダムジリ洞窟の調査

洞窟はアゼルバイジャン西部、カザフ市にある(図1)。ジョージア、アルメニアとの国境にあるアヴェイ山という石灰岩山塊の東、標高約560mの地点に開口している。ほんの数キロ、標高400m前後まで山麓部を下ると、ギョイテペ、ハッジ・エラムハンル・テペなど多くの新石器時代遺跡が分布するクラ河中流域ガンジャ・カザフ平原にいたる。山麓と平原の接点



図3 ダムジリ洞窟、Pit 9の発掘

にある遺跡ということができよう。沢の谷頭でもあり、洞窟内にはいくつかの湧水地点がみられる。ダムジリ(水のしずく)という名称も湧水からきている。

おそらくかつての河川流路に接して形成された浸食洞窟であって、横に長く、奥行きは短い(図2)。現地表面で計測すると幅が約70m、奥行きは最大7mとなる。発掘の主眼は2016年の試掘で設けたいくつかのピットのうちのひとつ、ピット9である。昨年までは3m四方の発掘区であったが、今年度はそれを4m四方に拡張した。ただし、堆積は深いため、安全を期し、最下層まで掘り下げたのは中央部の2m×3mほどである(図3)。文化層は深さ約4.5mまで続いていたが、その下は無遺物層であった。50cm角、深さ約1mの深掘りによってこのことを確認している。岩盤にはいたっていない。

前年までと同じく、最上層からイスラム期、青銅器時代、銅器時代、土器新石器時代、中石器時代、そして最下層では中期旧石器時代ムステリアンの文化層を検出することができた。層序を確認できたことはもちろん、発掘範囲を拡げたことで、より詳細な層位的観察が可能になったことは重要である。2017年までの調査では新石器時代文化層を前6千年紀の半ばに位置づけていたが、今回、少なくとも二枚の生活層があること、下層は前6千年紀の初頭にまでさかのぼる可能性があることが明らかになった。また、中石器時代の文化層も一部では50cmを超える厚さがあり、少なくとも二枚に細分することができるようになった。出土した遺物は必ずしも多くないが、炉跡、石組みなどの遺構もみつかっており、中石器時代から新石器時代にいたる文化、行動変遷をより詳細に跡づける材料が得られたということになる。打製石器、若干の土器

片など文化遺物、動植物遺存体資料も増加させることができた。予備的な所見によれば、中石器時代層に食料生産経済の痕跡は全くみられない。ただし、石器製作技術には新石器時代への連続を示唆する要素もみられる。このあたりの解析が、中石器時代狩猟採集民と新石器時代農耕牧畜民との関係を語るためのカギとなる。

さて、今年度は発掘区を洞奥部に向けても拡張したため、洞窟の岩壁そのものを露出させることができるようになった。その結果、下層にいくにつれ、岩壁のオーバーハングが顕著になり始めた。すなわち、中石器時代や新石器時代に人類が居住していた当時は、この洞窟が被覆している範囲は現在よりも広がったということである。より好適な生活環境が洞奥部にあったことが予想される。次年度は、さらに洞窟内部にまで発掘区を拡張し、炉跡分布や石組み構造など、生活空間の分析にまで解析の手をひろげる計画である。

3. おわりに

南コーカサス地方では中石器時代遺跡に関わるデータが豊富に得られているとはいいがたい。ジョージアやアルメニアではいくつかの遺跡報告があるが、それらには発掘精度が十分でないため層位関係がはっきりしない、あるいは、中石器時代の前半に位置づけられるものであるから新石器時代と比較するには古すぎる、などの問題があった。ダムジリ洞窟の中石器時代層は確実に前7千年紀の後半に位置づけられる。まさに、新石器時代開始直前の狩猟採集民が残したものである点、きわめて貴重である。今後、詳細な年代分析、出土品分析を実施し、農耕牧畜経済が伝播してきた際、地元集団はいかに対応したのかについて考察をすすめていきたい。

ところで、この洞窟では中期旧石器時代ムステリアンの石器群も見つかっているから、ネアンデルタール人が現生人類とどのように交替したのか、いわゆる「交替劇」研究にも直接貢献することができる。実は、この研究は、中石器・新石器交替劇の研究にも大いに示唆を与える。逆もしかりである。いずれも、技術の異なる複数の集団が接触し、一方が、生き残り他方が吸収されているプロセスの研究という点で共通している。ネアンデルタール人時代よりも、はるかに豊富なデータが得られる中石器・新石器交替劇の研究成果は有効な参照データを提供するにちがいない。我々のプロジェクトは、アゼルバイジャン国内でも関心の高い



図4 アゼルバイジャン文化大臣同席のダムジリ洞窟説明会

調査になりつつある(図4)。これを自覚して以後の調査の進展につとめる所存である。

今回の調査は、文部科学省科学研究費補助金(新学術領域『パレオアジア』、代表：西秋良宏)その他によって実施した。

■参考文献(昨年分に追加)

- ・ Akashi, C., K. Tanno, F. Guiliev and Y. Nishiaki (2018) Neolithisation processes of the South Caucasus: as viewed from macro-botanical analyses at Hacı Elamxanlı Tepe, west Azerbaijan. *Paléorient* 44(2): 75-89.
- ・ Akashi, C., F. Guliyev, A. Zeynalov, M. Munsurov and Y. Nishiaki (2018) Replacement or Assimilation? Plant Exploitation in the Mesolithic-Neolithic Contact Period of the Southern Caucasus. Paper presented at the *International Workshop on PaleoAsia2018*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, 16-18 December, 2018.
- ・ Arai, S., A. Zeynalov, F. Guliyev, O. Aripdjanov, and Y. Nishiaki (2018) To the East: Recent zooarchaeological studies concerning the spread of domesticated animals into Southern Caucasus and Central Asia. *13th ICAZ International Conference*, the Cultural and Convention Center at METU, Ankara, Turkey 2nd-7th September 2018.
- ・ Nishiaki, Y. and E. Baudouin (2018) In Pursuit of the Origins of Farming Societies in the Fertile Crescent and Beyond. *The French Research Day in Japan 2018/the 15th Anniversary of the French-Japanese SAKURA Program*, Maison franco-japonaise, Tokyo, December 12, 2018.
- ・ Nakazawa, T., M. Karino, S. Arai, K. Ohnishi, K. Kawahara, Y. Taniguchi, A. Tsuneki, S. Kadowaki and Y. Nishiaki (2018) Mass Spectrometry of collagen preserved in Neolithic animal bones for the identification of species. *The 66th ASMS Conference on Mass Spectrometry and Allied Topics*, San Diego Convention Center, San Diego, CA, June 3-7, 2018.
- ・ Nishiaki, Y., F. Guliyev, S. Kadowaki, and T. Omori (2018) Neolithic residential patterns in the southern Caucasus: Radiocarbon analysis of rebuilding cycles of mudbrick architecture at Göytepe, west Azerbaijan. *Quaternary International* 474: 119-130.
- ・ Nishiaki, Y. and F. Guliyev (2018) Mobility and sedentism in the Mesolithic-Neolithic contact period of the Southern Caucasus. *The Twelfth International Congress on Hunting and Gathering*

- Societies*, Penang University, July 23-27, 2018.
- ・ Nishiaki, Y. and F. Guliyev (2018) Gender perspectives on Neolithization in the Southern Caucasus. *The Eleventh International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East*, Munich University, April 3-7, 2018.
 - ・ 西秋良宏・A. ザイナロフ・M. マンスロフ・下釜和也・仲田大人・赤司千恵・新井才二・池山史華(2018)「南コーカサス地方の新石器時代—第10次発掘調査(2017年)—」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集 平成29年度 考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会編：22-24。
 - ・ 西秋良宏(2019)「文化史研究のための量子ビーム科学」『文理共創を革新する量子ビーム科学』ワークショップ。東京大学アイソトープ総合センター、2019年2月12日。